

# まんだら通信

第205号 (通巻240号)

平成25年07月 西暦2013年 佛曆2579年 皇紀2673年

安房国八十八ヶ所 第一番札所  
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org



## 『日本を、取り戻す。』

「この戦争、敗けるかも知れないな」と、ひそかに思われはじめた昭和十八年。破竹の勢いで戦いを進めるナチスドイツに占領された、フランスはパリの或る夜会で、長く駐日大使をつとめたポール・クローデルさんが、挨拶に立っていいました。「万一、人類が減びるようなことがあった時、最後まで滅びて欲しくない民族がある。それは日本民族です。何故なら、彼らは貧しいけれども高貴だからです」と。

（長崎の観光名所で有名な、グラバー邸の主人です）は「幕末に長州、薩摩、肥後、肥前、宇和島の各藩とは何十万、何百万両の取引をしたが、賄賂は一銭も使わなかった。賄賂を懐に入れるような武士は、二、三の例外を除いて一人もおらず、皆、高潔且つ清廉であったため、賄賂をしたくても出来なかった。このことは是非特筆大書して後世に伝えていただきたい」と話していたそうです。

明治十年ごろ、シナ大陸・朝鮮などを回って日本に着き、東京から日光を経て新潟に入り、日本海側を函館まで、鈴木という若いお供一人を連れた大旅行をして、名著『日本奥地紀行』を残したイギリス女性、イザベラ・バードは、心付けのつもりで差し出すチップを受け取らない人々に驚いています。江戸が、東京と呼ばれるようになって間もない頃です。運送会社と函館までの運送の契約をして出発したそうですが、行く先々の支店が馬と馬方の手配をしてあるので、心配することは何もなかったのだそうです。

その頃既に、日本通運のような全国規模の会社があったことに驚きますが、その日の宿に着いて、一日世話になった馬方さんに心付けを渡そうとすると、どう見ても貧乏そうな彼らが「私どもは特別なことをしたわけではなく、給金は雇い主がくれますから」と、いつも断られたと書いています。

請われて東京帝国大学の教授になったエドワード・モース先生は、『大森貝塚』を見つけて日本の考古学の草分けになりましたが、あちらこちら歩き回って『日本、その日その日』を書き

ました。貴重品を部屋に置いたままで外出しても、何もなくならないことに驚いている様子も書かれています。

これらは、筋を通すことを大切にしている日本人を、外国人がどのように見ていたか、お金について見ましたが、その頃来日した人たちはみんな、「見た目は貧しそうだが、朗らかで思いやりに満ちた」日本人を褒めそやしています。

こういう外国人の発言や書き物を調べて上げて「逝きし世の面影」という、隠れたベストセラーを書き上げた渡辺京二さんがいます。まだ読み終わっていませんが、「逝きし世の…」という題名から想像出来るのは「あの頃はあつたけれども、今は失ってしまった日本人の美德」です。

思い当たるのは例えば、「年寄りを敬い、子供を大切に扱う民族を、日本人以外に見たことがない」と多くの外国人が言っていました。今はどうか。

イザベラバード女史も「この国では毎日どこかで祭りがあるが、屋台では、子供が喜ぶようなものばかりを売っている。而も子供は、親に貰った小遣いで自由に買物ができるが、我がイギリスでは考えられないことである」と。また「子供同士の喧嘩には大人は立ち入らない。年長の子供が仲裁して解決するのである」と、頻りに感心しています。

今、大方の家では家族の団欒の場がなくなって、昔話や家毎の家風が伝わりません。

お年寄りにとって、永年住み慣れた我が家で、家族に見守られながら旅立つことが何よりの幸せです。

それぞれの家族に、それぞれの事情がありますから、一概に言うわけにはゆきませんが、差し障りを承知で敢て言う、知恵を働かせて地位やお金など比べ物にならない、親孝行という大事業をお勧めする次第です。

▼うっかりしていましたが、今月の標題『日本を、取り戻す』は、自民党の標語だそうですね。

でも、日本はこのままがいいと思っている人はいないでしょうから、誰が言ってもおかしくない言葉だと思いますよ。▼上の写真。毎年話題になるカルガモの引越しの様子ですね。インターネットで見つけたのですが、いつ、どこでなのか分かりません。

多分、丸の内辺りの会社の池から、皇居のお堀を目指しているのしょうね。幅何十メートルの道路を渡る親子を見かねたお巡りさ

んが、交番を飛び出して交通整理をする羽目になったのでしょうか、ホッと光景です。

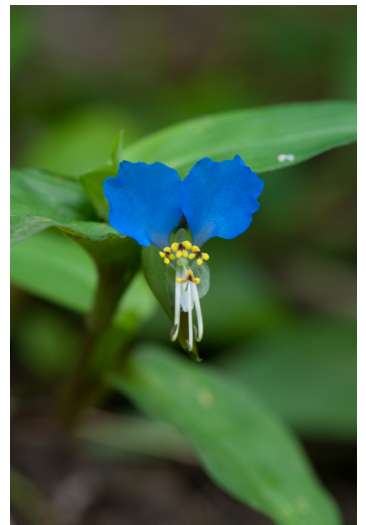
▼ふるさと納税はどこの役所も受け付けていますが、我が南房総市は、お隣の館山市に較べて随分負けているようです。殊に故郷を離れている皆さんの奮起をお願いします。▼今年は梅雨明けが随分早かったような気がします。梅雨明け十日は体調に気をつけよと昔から言います。おまけに突然の暑さで身体が付いて行きません。

自慢にもなりません、私も立派な“後期高齢者”。

熱中症で病院に運ばれる人が、毎日900人近くだそうですので、水分不足には呉々も用心しましょう。▼今月の野草はツクサ【ツクサ科ツクサ属】です。暑くなる今ごろの朝早く咲きはじめ、昼頃にはしぼんでしまいます。

他に余り例のない、変わった形の花です、名前の通りどこか儂げな感じがして、私好みの野草です。▼明日は期日前投票所の当番で、朝8時半から夜の8時まで市役所詰めです。

2013/07/08 龍渉



## 余滴

## につぼん人情小噺

三遊亭鳳豊ほうほう

### 第九十話 運転手の離婚

吉田繁樹さん(仮名)は、今年六十歳。いま、タクシートの運転手として働いています。「いま」というのは、五十歳まで自動車部品工場でベテラン工員として働いていたのですが、リストラされたのを機に失業保険で二種免許を取得して、タクシートの運転手になったからです。

しかし、その頃から、奥さんとの間にすきま風が吹きはじめました。よくあることですね。それまで専業主婦だった奥さんがパートに出はじめたのも、原因のひとつかもしれません。ふたりの間に、子供ができなかったのも、いまとなつてはまったく関係がないとは言えません。

でも、吉田さんには、それまで一生懸命、奥さんのために働いてきたという自負がありますから、夫婦喧嘩がはじまると負けてはいられません。

「これまで三食昼寝付きで生活できたのは、誰のおかげだと思っているんだ！」これは、いけませんね。だいたい、これで、奥さんとからくもつながついて、細くなつたとはいえども、一応、これも運命だと信じていた赤い糸がプツンと切れる。

いったん切れた糸が勝手につながるわけがない。奥さんの方だって、いままです安給料の中で一生懸命やりくりしてきたのですから、「三食昼寝付きが笑わせるよ」という調子です。

さあ、奥さんの反撃がはじまります。タクシートの運転手さんですから、基本的には朝帰ってきて、シャワーを浴び、昼過ぎまで寝て起きると、テーブルの上にカップヌードルがひとつ、ボンと置いてある、その横に殴り書きのメモ。

「仕事を終えてから、パートの女性たちと女子会に行つてきます。勝手に食べて、勝手に寝てください」

休みで家においても、奥さんは仕事に出かけますから、ほとんど口をきかなくなつてしまいました。これを倦怠期と言つたのは昔の話。いまは、奥さんの助走期というのだそうですね。奥さんが次の結婚をするための、準備期間だから。

そして、その日が思つたより早い時期にやつてきました。

「あなた、お話があるの。私、あなたとも暮らせません。ここに離婚届がありますから、私が帰ってくるまでにハンコを置いてください」

奥さんは、そうツツケンドンに言うのと、家を出ていってしまいました。吉田さんは、あわてて筆筒の中を開くと、そこにはもう奥さんの服は一枚もなく、すでにどこかに送られていることがわかりました。

(あの女！許せねえ！)

吉田さんは、激しい怒りの炎を燃やしなが、タクシートの運転席に座り、車を勢よく発進させました。

(あいつ、きつと、いい男を見つけたんだ。絶対、ハンコは押さないからな)

運転していても、離婚届のことで頭が一杯でした。

その深夜のことです。盛り場のネオンも消えはじめた頃、五十代のサラリーマンが手を上げ、吉田さんのタクシーに乗つてきました。かなり酔っている様子でした。

「(機嫌ですね) 吉田さんは、お客さんに声をかけました。」

「(ごめんな、ご機嫌じゃないんだ) どうされたんです?」「女房に死なれて、寂しくて、寂しくて……」

吉田さんはそのお客さんの家までの道すがら、この人の人生を聞くことになつてしまいました。

「僕はね、運転手さん、三年前に二十歳に

なつたばかりのひとり娘に死なれてね、生きる希望を失つたんだよ。そしたら、女房がこれからふたりで、あの子の分まで生きましようよつて言つてくれて、ふたりでがんばつて生きてきたら、今度は女房にガンが見つかつて、一週間前に亡くなつたんだよ。もう、僕はひとりだ。生きていられないよ。」

吉田さんは、何と言つていいかわからないうまま、思わず、「僕もひとりになりそうなんです」といまの状況を説明しました。

すると、その人は助手席にあごを乗せるようにして、こう言つたそうです。

「運転手さん、同じ別れるにしてもね、運転手さんの奥さんは、別れても、生きているじゃないか。死に別れるって、つらいよ」

(ああ、この人は奥さんを愛していたんだな。奥さんも幸せだつたらうな……)

そう、思いながら、ようやく、お客さんの家の前に着きました。

料金を支払つて、車を降りる時、その人は素晴らしい笑顔を見せ、「運転手さん、どうしたら奥さんを幸せにしてあげられるか、それを考えてあげてね。だってあなたの奥さんは生きているのだから」と言つて去つていったそうです。

会社に戻り、洗車をしていても、吉田さんには、そのお客さんの言つたことが耳に残ります。そして、街に朝日が昇るように、吉田さんに熱い思いが湧き上がつてきました。

(そうか、うちの嫁さんは、生きています。幸せになれるんだ……)

吉田さんは家に帰つて、離婚届にハンコをついたそうです。

この話、たまたま地方でタクシーに乗つた時に、運転手の吉田さんから直接聞いた話です。

あれから十年、女房と別れてもなんか清々しいのも、あの時のお客さんのおかげ

です。

近くを通つた時、気になつて、そのお客さんの家を訪ねたら、更地になつてました。近くの人の聞いたら、ご主人も数年前に亡くなつたとか……。僕にとつては、あの人はこれからあなたが向かうお寺の仏様みたいな人でしたねえ。

吉田さんは、そう言つて、私を西国三十三ヶ所巡りのお寺に連れていってくれました。

MOKUという月刊誌があります。発行部数は余り多くないようですが、大向こう受けを狙つた記事もありません。原子力発電など、私の考え方も真つ向から違つてもあります。けれども、我が道を行くという態度がとても爽やかで、説得力もあり、毎年継続購読しています。

『につぼん人情小噺』は、『まんだら通信』の読者のために、特にお願ひして転載しております。世界廣しと言えども転載を快諾する出版社など聞いたことがありません。

MOKU出版部と三遊亭鳳豊師匠には、ただ感謝あるのみです。

▼ご存知でしょうか『ふるさと納税』。毎年、税務署に行つて“ガラス張り”の確定申告をします。私にとっては、めまいがするほどの金額を納めることとなります。

国のためには大事なことです。相手は国では大き過ぎて手応えがまいちです。その点、『ふるさと納税』は使い手の顔が見えるだけに、手応えを感じます。納めた金額の9割程度が所得税から差し引かれます。

社会福祉協議会の場合も同じだと思います。

## 余滴の余滴